

当別町道の駅基本計画検討委員会  
答申書

平成26年10月

当別町道の駅基本計画検討委員会

# 1 はじめに

現在整備されている国道337号の4車線化は、当別町へのアクセス向上、流入人口の増加が期待される一方で、現状では沿線に観光・商業施設が無いことから、通過点的な存在となる懸念があります。第5次総合計画では、地域ブランドの創出、まちの魅力のPRが掲げられていることから、この国道整備をチャンスと捉え、沿線に農産物・特産品の販売や町の様々な情報を発信する「人を呼び込むための施設」として、当別町における道の駅構想が策定されました。

この構想を具体化するため、町では道の駅基本計画の策定を進め、その検討を行うために「当別町道の駅基本計画検討委員会」を設置し、委員会に対し道の駅における施設機能と管理運営方法について諮問がなされました。

当委員会では、諮問に基づき、2回の視察と8回の委員会を経て、道の駅のコンセプトやターゲットを整理し、ニーズに合致した施設機能についての検討と、管理運営方法の検討を行いました。検討にあたっては、施設規模や予算額より、整備を予定する道の駅が、この当別町においてどのような施設であるべきかに重点を置き、議論を進めてまいりました。

この答申書をもとに、道の駅の具体化に向けてより一層の検討が行われるとともに、多くの方が当別町に訪れ、交流人口の増加と経済活動の活性化に資する施設となることを期待します。

平成26年10月30日

当別町道の駅基本計画検討委員会 委員長 吉成 賢二

## 2 当別町道の駅基本計画検討委員会の経過について

当別町道の駅基本計画検討委員会による検討は、以下のスケジュールにより実施しました。

- (1) 第1回委員会【平成26年6月24日開催】
  - ・ 諮問書の手交
  - ・ 当別町道の駅基本構想の説明
- (2) 道内先進事例視察【平成26年7月3日開催】
  - ・ 名寄市、剣淵町、深川市を視察
- (3) 道内先進事例視察【平成26年7月9日開催】
  - ・ 伊達市、黒松内町、ニセコ町を視察
- (4) 第2回委員会【平成26年7月16日開催】
  - ・ 先進事例の振り返り
  - ・ 道内事例の紹介（株式会社リクルート北海道じゃらん）
- (5) 第3回委員会【平成26年8月7日開催】
  - ・ 「食」の機能について検討
- (6) 第4回委員会【平成26年8月21日開催】
  - ・ 「食」、「買」の機能について検討
- (7) 第5回委員会【平成26年9月8日開催】
  - ・ 「買」の機能について検討
- (8) 第6回委員会【平成26年9月25日開催】
  - ・ 「買」、「休」、「知」の機能、+αの機能、管理運営方法について検討
- (9) 第7回委員会【平成26年10月9日開催】
  - ・ 施設機能についてのまとめ、管理運営方法について検討
- (10) 第8回委員会【平成26年10月23日開催】
  - ・ 当別町道の駅基本計画検討委員会答申書（案）について協議

### 3 当別町道の駅基本計画検討委員会検討結果について

#### (1) 検討方法について

当別町道の駅基本計画検討委員会は、平成26年6月24日付け当ブ道第7号による諮問「当別町道の駅基本計画の検討について」を受け、昨年度に当別町が策定した「(仮称)当別町道の駅基本構想」を基に、検討を行いました。

検討にあたっては、道の駅の施設機能と管理運営方法の2点について諮問されていることから、2回の視察と8回の検討委員会を開催し、前半で施設機能について、後半で管理運営方法について検討しました。

#### (2) 検討結果について

今後、道の駅を検討する上での留意点等について、当別町道の駅基本計画検討委員会として一定の方向性を整理したので、その検討結果を、以下の項目に分類し、4ページ以降に示しました。

#### 1 道の駅の施設機能に関すること

##### 1-1 道の駅の基本コンセプトの整理および外部のニーズに合致した施設機能の調査・検討

###### 1-1-1 道の駅の基本コンセプトの整理

###### 1-1-2 外部のニーズに合致した施設機能の調査・検討

##### 1-2 当別町の地域振興に資する施設として必要な機能の調査及び検討

###### 1-2-1 「食」の機能（飲食の提供）について

###### 1-2-2 「買」の機能（特産品販売）について

###### 1-2-3 「知」の機能（情報発信）について

###### 1-2-4 「休」の機能（休憩機能）について

###### 1-2-5 + $\alpha$ の機能について

#### 2 道の駅の管理運営方法に関すること

##### 2-1 道の駅の管理運営にあたり、想定される管理運営主体のパターンの検討

## 1 道の駅の施設機能に関すること

### 1-1 道の駅の基本コンセプトの整理および外部のニーズに合致した施設機能の調査・検討

#### 1-1-1 道の駅の基本コンセプトの整理

(仮称) 当別町道の駅基本構想において、当別町の基幹産業である農業を軸に、農産物直売所の整備と地産地消の推進、町外から多くの人を呼び込むことを施設整備の目的に掲げています。

また、将来的に周辺への企業誘致に向けた先導的施設として位置付け、町の産業活性化と雇用の創出につなげることも目的に掲げられています。

このため、当別町が抱える課題解決に向け、『人を呼び込む施設』を念頭に置き、経済活動を活発化させ、当別の将来を変える起爆剤となるべく、下記に留意しながら道の駅の整備を進めることが重要と考えます。

まずは、道の駅の第1の目的として当別町に人を呼び込み、町内の観光・商業施設に人を周遊させ、交流人口の増加により経済活動が活発化する起点となることであると考えます。

そのためには、当別町は札幌市の隣町でありながら認知度が低いことから、道の駅の知名度を利用し、来訪者に対して、当別町の情報を的確に発信し、当別町の認知度を上げることが必要です。その際、道の駅において農産品や農産加工品の販売、イベントの開催により、「当別町は面白そうなことをやっている」というイメージを作ることが重要です。

そして、交流人口の増加は産業の活性化、雇用の創出につながり、特に若い世代がこのまちにおいて活動する下地をつくることができます。まちが活性化するとまちの魅力が向上することから、道の駅からより多くの人がまちを周遊する好循環へとつなげることができます。

また、道の駅は地域の拠点となり、住民の利便性を高める施設である必要があります。農産物や特産品の販売など買い物の便の向上や、防災拠点としての機能を持たせることで、地域の方々に愛される施設となることも重要と考えます。

これらのことから、委員会の検討に際する道の駅の基本コンセプトを「当別町の食を軸に、町内・町外の人に当別町の魅力発信する拠点となる道の駅」として、検討いたしました。

この実現に向けては、当別町の地域資源や特徴を活かした施設整備が必要となるため、当別町らしさおよび道の駅の立地条件（太美地区）を考慮し、施設テーマを設定することが望ましいと考えます。

## 1-1-2 外部のニーズに合致した施設機能の調査・検討

施設機能の検討にあたっては、道の駅の主な利用者となる層をターゲットとして設定することが重要です。前項のコンセプトで挙げた「食」を軸とした場合、「食」への関心が高く、金銭面の余裕があり、移動手段がある、などの特徴を持つ、40代及び60代の女性が利用の中心となりうると考えます。

40代女性は平日における友人との利用、休日における家族との利用の双方が期待でき、60代女性は平日・休日双方での利用が期待できます。どちらの世代においても、消費行動の主導権を握る女性をターゲットにすることで、家族単位での来訪を促すことが期待できるものと考えます。

地域別の利用者を考えると、当別町に近接し、建設が想定される当別町西部地区から10km圏内の人口約36万人のうち、26万人（73%）を占める札幌市北区・東区住民が主力となります。

これらのターゲットに対して、訴求する施設整備の方向性は、平日は女性同士又は60代の夫婦を想定した、ゆっくり落ち着ける少し贅沢ができるおしゃれな機能・空間を、休日は家族で気軽に利用しやすい機能・空間を想定します。平日と休日で利用形態が変わるため、出店方法・配置・演出等で双方の利用形態に対応できる工夫が必要となります。

また、昨今の訪日外国人の来道者数の増加による札幌市や小樽市の外国人宿泊者の増加や、国道337号の整備による新千歳空港からのアクセスの向上から、外国人観光客が将来的なターゲットとして想定されます。看板の表記など外国人向けの環境を整え、誘客することも考慮する必要があります。

## 1-2 当別町の地域振興に資する施設として必要な機能の調査及び検討

### 1-2-1 「食」の機能（飲食の提供）について

コンセプトを「食」、ターゲットを40代及び60代の女性とした場合、札幌を含め近郊には競合施設が多いことから、当別独自の魅力をもって札幌との差別化を図り、ターゲット層に合わせた施設・サービスを提供する必要があります。

飲食の提供を想定して整備する施設としては、レストラン又はフードコートが想定されます。ターゲットに訴求するためのゆっくり落ち着いた空間を創出しながら、それぞれのメリット・デメリットを考慮して、設置を検討する必要があります。

しかしながらレストランの出店は、占有面積も大きく施設整備の投資リスクが高いことから、整備におけるハードルが高いことが想定されます。レストランの厨房機能を活かした加工品の製造・販売など、施設の利用効率を高めながら、「食」の機能を充実させる工夫が必要と考えます。

このほか、道の駅本来の利用目的である、道路利用者の休憩機能と考えた場合、短時間で購入でき、持ち帰りができるテイクアウトの店舗は必須であると考えます。

また、多くの道路利用者に当別町の食を楽しんでもらうこと、町内の経済の活発化に向けた起業の足がかりとして、町内企業のチャレンジショップの設置も有効と考えます。

## 1-2-2 「買」の機能（特産品販売）について

当別町の基幹産業である農業、札幌市に近い立地を活かした特産品販売として、農産物の直売は必要不可欠です。「当別＝安心安全」という消費者のイメージづくりに向けて、農畜産物の品質確保のためのルールづくりが必要であり、品質を重視した適正価格での販売を目指すべきと考えます。

これらを実現するため、JAの助言を受けながら、早期に農家を中心とした運営主体の立ち上げに向けた協議を進め、販売・供給体制や販売方法について、具体的な検討を始める必要があります。

安心安全な農産物のイメージに向けて最も重要な要素は、新鮮であることと考えます。また来訪者に対して安心であることを訴求する方法として、エコファーマーなどの認証制度や、ラベルにQRコードを付与し、生産者の顔が見える体制を整えるなどの工夫も必要です。

直売所施設は、供給能力に合わせた適切な施設規模となるよう、現在の交通量ベースで規模を想定し、売り上げ状況により拡張できるような施設配置を念頭に置いて検討する必要があります。

時期によって商品の量が増減することから、用途や広さを状況に応じて変えられるような工夫をするとともに、他の建物または機能間の移動がスムーズで一体感のある配置、商品の搬入がしやすい工夫も必要と考えます。

施設整備にあたっては、過剰な投資が価格に転嫁されることがないように整備する必要がありますが、農産品の鮮度を確保するための必要最低限の環境を確保する機能は不可欠と考えます。

農産物加工品等の特産品販売については、「とうべつ Brandeli'」商品を中心とした地元産品の販売を基本としながら、商品の種類・供給量に応じて、周辺市町村・姉妹都市の産品の販売も視野に入れて検討する必要があると考えます。町外の産品は魚介類、乳製品その他加工品など、町内で調達できないものを販売することも、利用者の視点から考慮する必要があります。

六次産業化を進めるため、当別町産の規格外野菜などの高付加価値化につながるような加工品の製造・販売についても検討する必要がありますが、加工施設ありきで整備を進めるのではなく、誰が何をやるのかを明確化した上で、整備内容を検討することが肝要と考えます。

このため、レストランなどの飲食機能や直売所機能との併設・兼用など、施設の利用効率が高まるような工夫を検討することも必要です。



### 1-2-3 「知」の機能（情報発信）について

道の駅における情報発信機能については、整備の目的である『人を呼び込む施設』として道の駅への集客につなげることと、道の駅を起点として町内施設への周遊につなげることが重要です。またその手法は、道の駅に来訪する様々な客層に合わせて、広く普及し情報発信に有効なデジタルと、情報弱者にも対応したアナログを、効果的に組み合わせる必要があります。

道の駅への集客についてはインターネットを活用して、常に道の駅の新しい情報を地域の「手作り」で配信することが重要です。デジタルでの情報発信としては、YouTube による動画配信や Facebook、HP の開設・積極的な更新を進めることが必要です。

また、アナログによる対応としては、チラシの配布や道の駅出入口や交差点等への看板・電光掲示板、アドバルーンの設定などの工夫が必要です。これらを効果的に組み合わせることで、多くの来客が期待できるものと考えます。

また、インターネットにより個別の情報を取得することは容易いですが、それらの情報に関連付けて周遊する情報は得難いことから、来訪者が望むインターネットだけでは得ることのできないまちの情報を適切に案内するコンシェルジュを配置することも効果的です。

道の駅の整備にあたっては、道の駅を起点として町内を周遊することにより、交流人口の増加による経済活動の活発化を目的と掲げていることから、町内の施設や商店との連携による周遊が重要となります。

例えば、当別すぐろくや町内のスタンプラリー等で、道の駅を起点として町内各所を巡り、最後にまた道の駅に戻った際に特典を付与するなど、ゲーム性を持たせながら、リピーターを獲得する工夫も必要です。

このほか、気軽に町内を散策できるレンタサイクルなどを設置するほか、スウェーデンヒルズや太美地区の基線川の桜並木、石狩川下流当別地区の自然再生事業エリアなど道の駅周辺における豊かな自然を楽しむことができる散策ルートの設定などを行うことも有効と考えます。

いずれにしても、情報発信で一番重要となる観光情報の発信にあたっては、観光資源の発掘、ブラッシュアップに加え、担い手の育成も必要不可欠となるため、商工会、観光協会との連携のもと、総合的な観点から検討を行うとともに、新たな体制整備も踏まえて検討することも必要と考えます。

#### 1-2-4 「休」の機能（休憩機能）について

休憩機能は道の駅を整備する上では必須条件であり、利用しやすい配置を念頭に、施設内の滞在時間を延ばす工夫が必要です。ターゲットとしている40代及び60代の女性の利用を考えると、平日はゆっくり落ち着ける、少し贅沢ができるおしゃれな機能・空間を、休日は家族で気軽に利用しやすい機能・空間を検討する必要があります。

冬期間の休憩を考えると屋内の休憩施設は必須と考えますが、無料休憩所の設置場所を有料で利用するレストランに併設すると、利用者の心理的に利用しづらいと想定されます。

このことから、テイクアウトコーナーに隣接して無料休憩所を設置するなど、利用しやすい配置とする必要があります。

屋外では農村地域の立地を活用し、季節によって見ることができるイモの花やヒマワリなどの周辺の景観や、見渡すことができる手稲山、スウェーデンヒルズなどの遠景に合わせて飲食を楽しめる空間にすると、来訪者がゆっくりと楽しめると考えます。

また、家族連れで楽しめる空間も考慮する必要があります。建物に隣接して屋外のエアースペースや、周辺を流れる農業用水を活用した水遊びスペース、屋内のキッズスペースなど子供が遊べる空間があると家族が安心して楽しめると考えます。その際、トイレのベビーベッドや授乳室の設置、屋外には屋根付の休憩スペースを複数設置するなど、安心して休憩できる工夫も必要です。

道の駅においては24時間トイレの整備が必須となります。特にターゲットの中心となる女性はトイレのイメージによって施設の印象が左右され、サービス業においてはトイレの使いやすさや清潔感を重要視しています。このことから、道の駅においても来訪者が気持ちよく利用することができるよう施設整備を行うとともに、子育て世代、高齢者、障がい者に使いやすい機能の付与などを工夫する必要があります。

このほか、道路利用者に対して気軽に立ち寄れる駐車場を整備することも、道の駅の必須条件とされています。適切な規模を想定し、来場者が駐車できない状況に陥らないよう計画する必要があります。

### 1-2-5 +αの機能について

道の駅として基本的な機能である「食」「買」「知」「休」に加えて、多くの人を呼び込むため、更に誘客につながるよう、施設機能やサービスを加える必要があると考えます。

当別町内には国道沿いの集客しやすい場所でのイベントスペースがないことから、道の駅にイベントスペースを併設することで、多くの人を呼び込むことができると考えます。また、町内の別会場でイベントを行う際の駐車スペースとして有効活用し、道の駅からシャトルバスを運行することで、更なる誘客効果が期待できます。

また、町内を運行するコミュニティバスの停留所を設置することで、町内や札幌市北区の車を持たない方の道の駅への来訪手段を確保できるよう、運行事業者へ申し入れることも必要と考えます。

夏季の誘客策としては、屋外で食事ができるような景観を活かしたスペースやBBQコーナーなどを設置することで、行楽客の誘客につながり、更には道の駅においてカット野菜、肉類など地元産の材料販売も同時に行うことで、来訪者に地元の農産品や農産物加工品をその場で味わってもらえることも可能となります。

また、更なる施設への誘客策として、利用人口の増えている競技用自転車や、2輪車、キャンピングカーなどに対応できる駐輪・駐車スペースを整備し、道の駅をレジャーの経路地としてもらうことも一案と考えます。それに併せ、シャワールーム、携帯電話の充電スポットのような、道路利用者の利便性を高めるサービスの付加も肝要です。

道の駅の整備では、求められる基本的な機能に加え、多面的な役割も求められることから、必要な機能について、更に検討する必要があります。

まず、国道に面し、広い面積を占める施設であることから、町で進めている地域防災計画における防災拠点としての位置づけを行い、非常用発電機や備蓄倉庫等の設置など、防災拠点としての機能を付与することも必要と考えます。

また、道の駅は24時間不特定多数の来訪があることから、防犯対策としてのコンビニエンスストアなど24時間営業の店舗の設置や、施設内の防犯カメラの設置など、防犯対策を講じることも必要です。

加えて、環境負荷の低減、非常用の電源など多面的な利用も考慮して、再生可能エネルギーの積極的な導入を検討する必要があります。

このほか、当別町は、社会福祉法人ゆうゆうを始めとした、町内の福祉活動が全国的にも有名であり、一つのブランドとして確立しつつあることから、当別町のPRとして、町内の福祉活動と連携し、障がい者の就労の場としての活用も検討が必要と考えます。

最後に施設の整備にあたっては、整備予定地は北西からの風が強く、多雪であることから除雪や吹雪への対策、主要道路が北向き等の条件の影響を考慮して設計する必要があります。

また、集客数によっては、ゾーンの拡大を含む長期的な活用計画についても考慮するとともに、周辺に定期的な集客を見込める施設が配置されることも想定した施設配置とすることが重要と考えます。

## 2 道の駅の管理運営方法に関すること

### 2-1 道の駅の管理運営にあたり、想定される管理運営主体のパターンの検討

道の駅には、町に人を呼び込み、町内に多くの人を周遊させることにより、町の経済活動を活発化させる役割があります。

この役割を担うにあたっては、道の駅には、道の駅単体の収益といった効果のみならず、当別町全体の経済効果を高める目的があることを十分考慮し、管理運営のあり方を検討する必要があります。

そのためには、道の駅の建設に向けて、行政・J A・商工会・観光協会など関係機関の熱意ある参画が必要不可欠であり、一体となった取り組み体制の構築が重要な鍵となります。

また、組織の連携のみならず、農産物販売における生産者による協議会の立ち上げなど、多くの町民が関わりながら、当別町の活性化に向けてスローガンなどにより意志統一を図り、目的を共有することが必要となります。

特に、これらの運営や連携にあたっては、これからを担う青年世代の積極的な関わりが重要となります。

道の駅は、町のPRを始めとする公的機能に加え、レストランや特産品販売などの収益機能を有する施設であります。このことから、管理主体には、経営的な視点を持った人員と、関係機関と連携しながら、まちづくりを行える人員が必要不可欠となります。

また、個別の施設機能については、直営のみならず、飲食機能や特産品販売機能の一部をテナント貸しすることもできるよう、柔軟に対応する必要があります。

施設の建設や管理運営においては、ファンドなど民間資金の活用についても検討が必要です。ただし、民間資金の活用は収益性の追求が必要となることから、まちの経済活動の活発化につながる地元農産品を活用した飲食や農産物販売など、収益事業への活用を主眼におく必要があります。

最後に、現在、(仮称)当別町道の駅は、平成28年度内の完成を目指し、各種作業が進められていますが、今後、管理運営主体の立ち上げに向けて、各団体を始め、参加する農業者、飲食店など各企業との協議や調整が必要となります。

これらの協議や調整に加え、各団体や企業においては開設に向けた事業計画の策定や、開業準備を行うための一定の準備期間が必要となり、道の駅の目的である「経済活動の活発化」の実現には、必要不可欠な準備となります。

このため、平成28年度内の開業を一定の目標としつつも、今後の各団体との協議や調整、開業準備に要する期間を十分考慮の上、最適な開業時期の設定となるよう、検討する必要があります。

当別町道の駅基本計画検討委員会

委員長 吉成 賢二

副委員長 浅井 正二

委員 青山 雅典

委員 浅野 政輝

委員 市川 智大

委員 内海 太郎

委員 片桐 文雄

委員 狩野 菊恵

委員 竹田 奈緒美

委員 山崎 公司